

## マルコによる福音書16章 「よみがえりを信じる」

### 1A 「ここにはいない」イエス 1-8

1B 死んだイエスへの献身 1-3

2B 復活の知らせ 4-8

### 2A 信じて救われる福音 9-20

1B 証言を信じない頑なさ 9-14

2B 世界宣教命令 15-20

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、ついにマルコによる福音書の最後の章、16章に入ります。私たちはこれまで、キリストが十字架に付けられて、死なれて葬られるという苦しみを見てきました。そしてついに、イエスが墓の中から甦る話を見て行きます。これから読んでいくところは、キリスト教にとって最も大切なところ、私たちの信仰がこの事実に関心かかっています。イエスが、自分たちの負い目である罪のために死なれ、葬られて、そして三日目に甦ったということです。このことのゆえに、私たちは生き、この良き知らせを私たちは人々に伝えています。

### 1A 「ここにはいない」イエス 1-8

1B 死んだイエスへの献身 1-3

1 さて、安息日が終わったので、マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。2 そして、週の初めの日の早朝、日が昇ったころ、墓に行った。

この話は、そのまま15章から続いています。イエス様が、十字架に付けられて死なれました。その様子を女たちは、遠くから見ていました(40節)。そこにここに書かれている女たちの名前も出て来ます。マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、それからサロメという女です。そして、イエス様が十字架から降ろされ、アリマタヤ出身のヨセフの墓の中に納められるのも、マグダラのマリアと、もう一人のマリアは見つめていました。

ユダヤ人にとって、安息日は必ず休まないといけません。遺体を葬る時に、香油と香料を塗って、その腐敗が抑えられるようにするのですが、安息日の始める金曜日の日没がすぐに近づいていたために、それをせずに、ただ亜麻布に包めてヨセフは葬りました。女たちは、イエス様を愛していて、ずっとこの方に仕えていました。すでに死なれたのですが、この方に最後まで尽くしたいという愛情から、この行動に出たのです。安息日が終わるのが、土曜日の夜です。ユダヤ人の一日の始まりは、日没からであり、次の日の日没までが一日なので、安息日が終わり日曜日になるのは、土曜日の日没後です。それで彼女たちは、すぐに香料を買いに行きました。それで、墓に行っても、

何も真っ暗で見えませんが、夜明けを待っていたのです。そう、日曜日の夜明けです。その時に起こった出来事が、全ての全てを変えるものでありました。

ちなみに、なぜ私たち教会が日曜日に礼拝を守っているのか？これを一言で言えば、「イエスが死者の中から甦ったことを祝うため」であります。毎週日曜日に、この事実を確認するために集っています。ですから、実は復活祭といっても、毎週が復活を記念しているのです。

3 彼女たちは、「だれが墓の入り口から石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。

ユダヤ人たちの墓は、特に裕福な人たちは、岩を掘った横穴式のものを使いました。そこに壁龕を掘り、遺体を安置します。そして石で封印をしますが、その石を転がすのは、力ある男が2-3名必要なくらい重いものです。女たちは、そういった男たちがいるかどうか分からずに、誰が石を転がしてくれるかどうか？とっていました。

ここまでなら、普通の物語でありましょう。偉大な預言的指導者がいて、ずっと献身的に付いて来ました。希望をもって付いて来たけれども、なぜか、ローマ当局によって十字架刑の処せられました。何の罪もないお方なのに…。弟子たちは、とっくにイエス様を見捨ててしまっています。女たちができる精一杯の愛の表現は、ご遺体を丁重に扱うことぐらいです。もう、すべてが終わりました。ところが、ここから大異変が起こります。

## 2B 復活の知らせ 4-8

4 ところが、目を上げると、その石が転がしてあるのが見えた。石は非常に大きかった。5 墓の中に入ると、真っ白な衣をまとった青年が、右側に座っているのが見えたので、彼女たちは非常に驚いた。

下を見ながら歩いていたのでしょうか、道がそれほど平らではないところを歩いていて、それで目を上げてみると、なんと、石が転がしてあります。しかも、この石は非常に大きかったと、言っています。これは、人間の力以上の力が働いていることを、彼女たちはとっさに感じたのです。そして、墓の中にはいって、内部を覗きました。外側からは中が見えないからです。すると、そこに「真っ白な衣をまとった青年が、右側に座っている」とありますね。この青年のように見えるのは、明らかに天からの使いです。聖書には、神々しい力ある天使が人の姿をして表れています。

私たちが、天国というものに少しでも触れるなら、そこには女たちのように非常な驚きがあるでしょう。恐ろしくなるかもしれません。それは、あまりにも聖く、あまりにも神々しく、全く汚れとか、欠陥とかないものだからです。そこに、完全で正しい神が住んでおられるからです。主なる神がおられるところに、天国があると言ってよいでしょう。そこから天使が遣わされているので、天使も神の

聖さや栄光を反映しているのです。イエス様は言われました、「マタ5:3心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」本当に神の国に、天の御国に入ることのできる者は、その国に入れるように自分自身をきれいにして入れる人ではありません。むしろ、あまりにも聖なる方、正しい方であることに気づいて、圧倒されて、自分がいかに汚れているかをどうしようもないほど悟り、気づく時に入れます。それは、他の人との比較ではなく、全く欠けのない神との比較によって、もたらされます。自分の心には何も良い物がない、心の全くの貧困状態が与えられた時に、矛盾するようですが、初めて天国に入れます。なぜなら、神は、自分たちの功德によってではなく、ご自身の恵みによって私たちを招き入れたいと願われているからです。

6 青年は言った。「驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。

いるはずの方が、ご遺体があるはずなのに、そこにはない。それで女は驚いていますが、驚くことはないと言っています。なぜなら、すでにイエス様は何度となく、ご自身が三日目に甦ると弟子たちに伝えておられたからです。既に伝えていることが起こっているだけなのだよ、と言っています。

女たちは、ここにはいないイエス様を捜していました。もう甦られて、生きて働いておられるのに、それでも捜していたのです。青年は、収められていた場所をはっきりと示しました。いないことを確認させるためです。前回、私たちは、人が死んだ時、本当に死んだことを確認する必要があることを話しました。ピラトが百人隊長に尋ねて、確かにイエスが死んだことを確認させました。ここではその反対で、天使が納められた場所に、イエスがいないことを確認させたのです。15章の最後には、マリア二人が納められた場所もしっかりと見ていたことが書かれています。確かにいません。

主は甦られました。これは、歴史的事実です。この事実によって、十二人の弟子はヨハネを除き、みなが殉教しています。この事実によって、これまでどうしようもない人生であった人が、180度変えられています。しかし、私たち人間はしばしば、失望の中に生きています。自分がこれまで努力してきたことが、すべてうまくいかなかった。自分で自分を救おうとしたが、全く通用しない。だめだ、あとは虚しく生きるしかない。一日、一日を、ただ暮らしていただけだ、と。しかし、自分がもう終わりだということに、どれだけの真実があるのでしょうか。「何を言っているんだ！私の会社は倒産したんですよ！」とか、「何を…、私の結婚生活はもうズタズタで、あとはただ同じ屋根の下で垢の他人のように暮らしていただけよ。」とか、それこそが現実であり、真実だと思っています。それはあたかも、女たちが、ご遺体のイエス様を捜しているかのようです。

しかし、そこには真実はありません。命は既に働いているのです。復活の命が、キリストにあっ

で働いているのです。「また、たわけたことを・・・」と思われるかもしれませんが。それがまさに、弟子たちが感じていたことでした。あとで、彼らは全くイエス様の甦りを信じていない姿が出て来ます。もし、この命が自分で振り絞って出さなければいけないと思ったら、もちろん何もできません。貴方には、何の力もないのです。何の解決の道也没有ありません。しかし、イエス様が弟子たちに以前、言われたように、「10:27 それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。」であります。もうすでに、イエスの復活の命は働いています。イエス様は甦って、今、生きておられます。必要なのは、その言葉を信じることです。

7 さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』と。」

イエス様は、すでにご自身が甦られて、ガリラヤで会うことを語っておられました。ガリラヤは、彼らの出身地です。そこで、イエス様は生き活きと、神の国の良き知らせを伝える働きを行われていました。弟子たちは、イエス様の生き活きとしたお姿をずっと見ていました。そこに主が再び戻られるのです。つまり、ガリラヤでのイエス様の働きのように、これからも同じように働くことを約束しておられるのです。

そしてここで、「ペテロに伝えなさい」とイエス様は敢えて、彼の名を出しておられます。ペテロの名が最後に出て来るのは、14章の最後です。ペテロが、イエス様を三度知らないと言って、裏切って、それで泣き崩れたところで終わっています。私たちの信仰で驚くべきことは、その恵みであります。恵みとは、「受けるに値しないものを受けると」いうことです。ペテロは、主であるイエスを三度、知らないと断言したとんでもない人物ですが、イエス様はそれでも、ペテロに教会の指導者になるようにお立てになるのです。

私たちは、常に自分たちの行いに頼ろうとします。自分が良くできて、それで神に認められたいと願います。自分には全く良い物がない、いや、神に拒まれるようなものがたくさんある。それにも関わらず、神は私を立てて、私が神に仕えるようにしてくださっているという自負です。その神の圧倒的な恵みを知って、畏敬を抱きながら、主に拠り頼んでついて行くのが、キリスト者の姿です。

8 彼女たちは墓を出て、そこから逃げ去った。震え上がり、気も動転していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

彼女たちは、初めは、恐れ震えあがってしまいました。天から来た御使いに出会う人々は、大抵、このような反応になります。けれども、他の福音書を見ますと、彼女たちはイエス様の言われたことを思い出し、それからイエスご自身が彼女たちにお会いになって、彼女たちはイエス様の足元でひれ伏す場面がでてきます。そして、弟子たちに甦ったことを伝えることになります。

私たちは、甦りを信じがたいものとするでしょうか？実は、死ぬことによってかえって生きるという原則は、自然界にも働いています。イエス様がこう言われたことがあります、「ヨハ 12:24 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」種が、例えば机の上に置いてあるだけならば、種としては存在していますが、それだけです。けれども、土の中に植えられて、発芽したらどうなるでしょうか？種の存在はなくなります。けれども、後に数多くの実を結びます。死ぬことによって、命が芽生えるのです。

これが、人間の在り方にも言えます。私たちは、負債を持っているような存在です。自分のしたことによって、その結果を負っています。実は、人間の世界、これ自体が負債を負っています。先に生きてきた者たちがいて、その人たちが行ったことの世界があります。聖書では、人類の最初の人々が神のそばにおらず、勝手に動いたので、その結果を刈り取りました。そして、その子孫もいろいろな形で背いて生きてきました。そして今の世界があります。そして、一人一人の人生でも同じことが言えるでしょう。自分の行ったことの負い目があります。これを聖書は「罪」と呼びます。本来、自分の造られた神を知って、この方に信頼して生きるべきなのに、自分でやっつけ、自分の力と計画でやっつけとしていきます。これは高ぶり、奢りであり、そのために自分の人生に狂いが生じています。

このことを神はよしとされず、こよなく愛しておられる方は、ご自分の独り子に全ての背きの罪を十字架に負わせることによって、この方が死なれることによって、その後処理をしてくださいました。イエス様が言わば、私たちの尻拭いをしてくださったのです。そしてそのゴミのようなものは、キリストの死と共に葬られました。そして、キリストは私たちに命を与えるために甦られました。後始末をしてくださっただけでなく、新しい始まりを下さいました。私たちの罪のために、身代わりになって死んでくださった同じイエスが、今度は新たに私たちに命を与える。罪の性向によっていつも、同じことをしてしまう救われない自分を、キリストご自身が信じる者に生きてくださることによって、新しく生きることができるようになってくださったのです。

## **2A 信じて救われる福音 9-20**

鍵括弧の部分がありますが、そこは飛ばして9節に行きます。

### **1B 証言を信じない頑なさ 9-14**

9〔さて、週の初めの日の朝早く、よみがえったイエスは、最初にマグダラのマリアにご自分を現された。彼女は、かつて七つの悪霊をイエスに追い出してもらった人である。10 マリアは、イエスと一緒にいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところに行って、そのことを知らせた。11 彼らは、イエスが生きていて彼女にご自分を現された、と聞いても信じなかった。〕

イエス様の復活を初めに伝えたのは、マグダラのマリアでした。他の女たちと一緒に墓に行った



のですが、たぶん、彼女は足早に動いて、最初に到着したのでしょう。ヨハネ 20 章に、詳しい話が載っています。彼女は、イエス様のご遺体を誰かが持って行ってしまったと思い込んでいましたが、そこでイエス様がおられました。そこには園がありましたが、園の管理人だと思い込みました。ところが、「マリア」とイエス様が声をかけられると、彼女はすぐにイエス様だと分かり、「ラボニ(先生)」と言って、しがみつきました。イエス様は、しがみつかないで、弟子たちに知らせなさいと言われたのです。

彼女は、七つの悪霊を追い出してもらったとあります。恐ろしい生活を送っていたのでしょう。ですから、それだけイエス様に解放していただいて、何も残されていなかった彼女には、イエス様が全てになっていました。けれども、最初の目撃者であり、最初に伝えた人が、マグダラのマリアだったということに気づいてください。キリスト教は、自分の良いところではなく、このように自分ではどうしようもないところを、イエス様が解放してくださった、救ってくださったという体験を、証言を持っている人々の集まりです。

問題は、それを聞いた人々が嘆き悲しんでいて、イエス様が甦ったことを聞いても信じなかったことです。悲しみがあまりにも強くなると、その感情でイエス様が確かに生きていることを見失ってしまいます。悲しみの中に、すでに喜びの知らせが始まっているという事を知る必要があります。

12 それから、彼らのうちの二人が徒歩で田舎に向かっていたとき、イエスは別の姿でご自分を現された。13 その二人も、ほかの人たちのところへ行行って知らせたが、彼らはその話も信じなかった。

この二人の弟子の話は、ルカの福音書 24 章に出て来ます。「イエスは別の姿でご自分を現された。」とありますが、イエス様のことを二人は気づいていませんでした。一緒にパンを裂いて食べた時に、その身近な温もりを感じ取って、イエス様だと分かったのです。けれども、そこから消えてしまいました。この二人が話しても、やはり弟子たちは信じませんでした。

14 その後イエスは、十一人が食卓に着いているところに現れ、彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった。よみがえられたイエスを見た人たちの言うことを、彼らが信じなかったからである。

マグダラのマリアが話し、二人の弟子が話したのに信じなかったので、イエス様はついに、十一人の前に直接、現れました。ルカ 24 章によれば、きちんと食事を一緒に取られていますし、手や足を見せて、幽霊ではなく、確かに肉体を持っていることを示されました。そして、「彼らの不信仰と頑なな心をお責めになった」のです。

イエス様は、以前から、信じることについて強調しておられました。この信じるということは、何か

無理やり信じることはありません。そうではなく、自然に、ある意味でいつの間にか、寄り添って頼るような感じです。自分では理解できなくとも、この方は主であるから、私は受け入れますとして信頼することです。あなたの信仰があなたを救った、という言葉もイエス様は何度となく言われました。イエス様に信頼する時に、イエス様が事実、生きているということを発見できるのです。

人は、信じるという事が無ければ生きられません。「それは非科学的だ」という人こそ、非現実的です。まだ目で見えていないものを、私たちはどれだけ信じているでしょうか？この建物が崩れるかもしれないのに、それでも安心して今、聞いておられます。この建物は安定していると思っているから、安心して信じています。そして人は、希望がなければ生きられません。そしてもう一つ、愛がないと生きられません。信仰と希望と愛、これが永続すると、コリント第一 13 章で教えています。ですから、どんなの証言があっても、証拠があっても、自分に信じるという行為がなければ、実際に有る物を有る物として享受できないのです。

## 2B 世界宣教命令 15-20

15 それから、イエスは彼らに言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。16 信じてバプテスマを受ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。

マグダラのマリアがイエス様の甦られたことを伝えました。二人の弟子たちが伝えました。こんなにすごい知らせ、良き知らせがあるのだから、これを自分の中だけに閉じ込めることはできません。このすばらしい知らせを、他の人々にも伝え、分かち合うということを、イエス様は弟子たちに宣べ伝えなさいと命じておられます。しかも、ユダヤ人たちの間だけでなく、全世界に対してです。マルコによる福音書が、当時、世界の中心であったローマにいるキリスト者に、主に念頭を置いて書いたと言われています。そして今、極東にある日本にも福音が伝えられていて、今、ここ西日暮里でも、このように伝えているのです。

イエス様は、信じることを再び強調されています。信じることによって、神の用意されている救いを自分のものとすることができます。神が救いたいと願われているのですが、私たちが心を開いて、お任せすることなくして、その救いを自分のものとするできません。そして、本当に信じていることを示すために、バプテスマを受けます。洗礼のことですが、バプテスマは水の中に入り、またそこから出て行きます。自分が、キリストが死なれたように、自分の罪に対して死んでしまっているのだと認め、そしてキリストが甦られたように、自分も新しい命を与えられたのだということを示すのです。水が、墓を意味しています。

そして、せっかく用意されているのに、信用しないのであれば、自分の負い目、罪の中で死んで、自分のしたことに応じて、終わりの日に報いを受けることとなります。死んでもまた生き返り、神に

裁かれて、苦しみ場所に投げ置かれます。

17 信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、18 その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」

これは、イエス様がかつて行われたことを、全世界に福音を宣べ伝えている者たちにも、与えられる印ということです。イエス様は、悪霊を追い出され、病人に手を置けば癒してくださいました。使徒たちも、使徒の働きを見れば、イエス様の名によって同じ働きをしていました。パウロに至っては、手で蛇を掴むということもしていました。噛まれたのですが、害を受けませんでした。こういった奇跡を通して、使徒たちが語っている主の言葉は確かなものなのだと知ることができるのです。

再び、これがローマにいる人々に主に書かれていることを思い出してください。ユダヤ人ではないですから聖書の知識を持っていません。けれども、目で見える形でそのような印があれば、確かにその言葉には力があると確かめることができますね。世界の各地で、確かに宣教師たちによって悪霊追い出しもあり、病人の癒しもあります。非衛生な水を飲まなければならないようなこともあります。それでも害を受けないという奇跡もあります。

19 主イエスは彼らに語った後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。]

主イエスご自身は、その後、天に昇られましたが、けれども、もうひとりの助け主である聖霊を弟子たちに注いでくださいました。それで、聖霊によって弟子たちと共におられ、今も、聖霊によってイエス様は私たちと共におられます。ここで大事なことは、「みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた」であります。印を第一に求めても、与えられません。印が大事なのではなく、御言葉が人を変える力があり、御言葉があつて、それから印が伴います。印以上に、最も大きな奇跡は、目に見えないものを信じている自分です。そこから命が流れます。